

随想

生きがいについて

働く人に働き甲斐を持たせる経営者は【悪】か

（株）PQQ研究所 加藤 宏光

小時学語苦難円（若いとき文  
学を学ぼうとしたが、完璧に  
行き難く苦労した）

只道工夫半未全（その時は工  
夫が半端で完全でなかったと  
思っていた）

到老始覺非力取（老人になっ  
て、強引にやっても駄目だと  
わかった）

三分人事七分天（努力でかな  
うのは三分、残り七分は天賦  
の才による）

趙甌北（一七二七～一八一四  
年・清時代の詩人）

この詩を引用していたのは、  
大阪大学で最初に環境工学科を  
新設された《新津 靖》博士で  
ある。本日（平成二十九年三月  
三十一日）に別のものを探して

いて見つけた、今は亡き父の資  
料の中に《あなたの一生涯を決  
めるもの、副題として運命・思  
惑・納得》という小論文を見つ  
けた。残念ながら何に寄稿され  
たものか由来はわからない。

この先生は日露戦争時代（明  
治三十七～三十八年）に生まれ  
た方で、父の旅順工科大の六年  
先輩にあたり、その後父が大学  
に奉職するにあたってさまざま  
にお世話になった方である。

専門は工学であるが、その文面  
にはさまざまな分野に博識であ  
ったことがうかがえ、自身の浅学  
を恥じる思いがしきりであった。

この文章を書かれた時に氏は  
八十八歳とのこと。数えてみる  
と昭和六十年頃になる。現在で  
も高齢といえるこの年齢で、時

代を見通した論旨での記述に改  
めてここに紹介したくなった。

引用を列挙してみると、アメ  
リカンジョーク、プラトンの言  
葉、ニヤール、北欧バイキング

の由来、エスキモーの風習、先  
に挙げた趙甌北、室尾犀星の詩、  
フルベッキの写真と由来、アメ  
リカの修正憲法での自衛の責

任、古代ギリシャの民主主義古  
代中国の四大発明（羅針盤・火  
薬・神・印刷術）これらはヨーロ  
ッパで工業化された産業として大  
成、フランス革命の裏話さら

には正岡子規のいまわの際のす  
さまじいほどのエピソードまで、  
話題の広さは果てしない。考え  
てみれば著者の父も経営工学分  
野の先駆的存在として工学分野  
に特化しながらも、歴史、地理、

文学（とくに漢文）や医学・薬  
学におよぶ広範な領域にプロは  
だしの知識と経験を持つていた  
（ちなみに、三重から大阪へ引  
つ越した折に庭の一角に基礎ま  
でしっかりした倉庫をノミや鉋  
を使いこなし、自分一人で建  
ててしまったものである）。

このような博識の人々が明治  
から昭和にかけての日本の基礎  
を作り上げたのか、と改めて感  
心してしまふ。

新津博士のこの著述の初めに、  
人間の特質として《人生の意味  
と生きがいの意味への考察》が  
ある。以下に一部を引用する。

古代プラトンは『人生とは死  
に対処する訓練だ』といいまし  
ましたが、訓練とは死を一刻一秒で  
も先に追いやろうとする悪戦苦

闘の所業です。そういえば、聖書、  
仏典、論語、孟子から始まってあ  
らゆる伝記、小説、評論に至るま  
で、万巻、兆巻の書は、ことごと  
く人生の意味と生きがいの意味  
へのこじつけの故事がないのに、  
いかにもあるように、理由、理屈  
をこじつけて、自分たちだけが  
自己満足する『生きがい論』とい  
つてよいでしょう。それは二、五  
五二種類の哺乳動物のうちで、  
ただ一つ人間だけが、創造、空想、  
幻想という未来志向によって、  
無限の生に執着する因果な変態  
動物に進化したからです。中略

『生きがい論』があるなら、『人  
間がどのように死ぬか』という  
『死に様論』があっても良いでは  
ないか、ぜひぶん探し回って見  
てみました。『ニヤールのサガ（原  
名アイランドサガ）』です。中略

賢者グルナルの問い『あなた  
自身（ニヤール自身）は何で死ぬ  
のかわかっているのですか？』  
ニヤール『わかっているとも。  
おれもお前も思いがけないこと  
で死ぬんだ……』

このストーリーは八十八歳に

なった新津博士が、自分の人生  
と対比しながら、過去の偉人の  
死に至るまでの人生をたどりつ  
つ、若者に人生を決める運命、思  
惑、思考、納得をサイエンス・モ  
ードで示そうとするものであった。  
その中で《人間は意欲し、創  
造することによってのみ幸福を  
勝ち得る》というフランス思想  
家のアランの言葉を借りて生き  
がいを示唆している。

『生きがい』は著者の世代の  
若いころには、口角泡を飛ばし  
て青臭い議論を重ねたテーマで  
あった。そして、今もそうであ  
るべきと信じる。『生きがい』  
を持たないからこそ夢が描けず、  
人生の夢が描けないからこそ、  
現代日本の世相が何となく浮き  
上がっているのではあるう。

著者が大学卒業するのは日  
本の経済は右肩上がりに進展し  
ていた時代であり、同級生のみ  
でなく学歴や立場を問わず若者  
たちは皆《自分が社会をつくる》  
という気概を持っていた。以前  
に紹介した家禽試験場に入り  
していた動物薬ディーラーの若

い営業責任者は高卒であった。  
彼は『お客さんの導入したヒヨ  
コが病気になるか、安定する  
まで育雛舎に泊まり込んで、様  
子を見ている』と語っていたこ  
うした意気込みも、当時の世の  
中にかかわる覚悟を反映してい  
るものといえよう。

過日、ある養鶏分野外のオー  
ナー経営者と若い世代が無気力  
である原因を語り合った。著者  
と意見が重なったのは『その責  
任は経営者にある』という点で  
あった。今、東芝が経営の危機  
に至っている。東芝に限らず、  
オーナーが経営者でない場合、  
しばしば経営がじり貧になる。

一方、昨日のインスターネットニ  
ユースにファーストリテーリン  
グ（ユニクロ）の柳井社長が『ト  
ランプ大統領の政治指針（アメ  
リカで販売するものはアメリカ  
国内で生産）次第で、ユニクロ  
はアメリカ撤退をためらわない』  
と明言している。アメリカの生  
産基盤がユニクロの品質を維持  
するに満たない、それゆえに、  
商品が顧客を満足させきれない

のが理由だという。  
オーナー社長（もつともファ  
ーストリテーリングはすでにオ  
ナー会社の域に収まらないか  
もしれないが……）の決断はこ  
のように厳しい。無限責任を負  
うがゆえに!! そうしたオーナ  
ー社長は中小企業に多い。一方  
下請けに甘んじて生きてきた長  
い歴史で、ある意味中小企業は  
疲弊している局面を有すること  
も事実であろう。ともあれ経営  
者にとって働く人々が生きがい  
を持つてくれることは、究極の  
望みである、と信じる。

一方で、最近『働き甲斐パワ  
ハラ』という新しい言葉がマス  
コミで語られることがある。何  
かと思えば、『働く人に働き甲  
斐を持たせることで、過労に追  
い込む経営者の姿勢』を問題と  
しているようである。

どんな事情があるのかは知ら  
ないが、働く人々に働き甲斐を  
持つてもらふことを【悪】とす  
るこの風潮は、なまり切ったわ  
が国の風潮を表しているもの  
と、嘆かわしく思われる。